



FRAUMÜNSTER – PREDIGTEN

フラウミュンスター説教

クラウス・バルテルス教授

ニクラウス・ペーター牧師

2012年12月9日待降節第二主日

自己の配慮とその発見

「…だが、何とか可能な限り良いものとなるようにと、君の理性と君の魂一つまり、君自身、そう君自身—に心を配り、慮ることを、君はしないのか？」（プラトン『ソクラテスの弁明』）

「自分で、自分で、自分で！」昔から、小さな子どもたちというものは、まだ言葉をきちんと話せるようになる前からそう抗っては、ジャケットのボタンを自ら掛けることや、手袋を自分で身に着けることをしたがるものです。「自己、自己、自己の実現を！」最近では、大の大人たちがそう叫んでは、他人の生き方やよその境遇に寄りかかることをやめさせたがります。まさに「自己」の好景気。自律は求められますが、他律はタブー視されるのです。「自己」…ギリシャ語では、**αὐτός**（アウトス）といいます。ですから、ドイツ語で「わたしの車 = **mein Auto**（マイン アウトー）」と言われるとき、厳密には「わたしの自ら」と言っていることになりまして—いやもちろん、そこで意図されているのは、そのように言う人の自意識や自己理解に拠った固有の自己などではなく、ただ「自動 = **Automobil**（アウト・モビール）」というぐらいの意味（つまり血のかよった馬なしに、自分から馬力を出して動き出すという意味）で、「自ら動くもの」ということですね。

ともあれギリシャ語の**αὐτός**（アウトス）は、今話題にしましたとおり「自ら」をあらわします。言い換えれば、ある人間にとって、その周りにいる他とは違うものとしてのその人「自身」をあらわすのです。このごく月並みな語が、ソクラテスとプラトンによって、自己発見の道しるべとなりました。昔から、デルフォイの〔神〕アポロンは、自らの〔神殿〕参拝者らを、「汝自身を知れ！ **γνώθι σε αὐτόν**（グノーティ・セ・アウトン）！」との呼び声をもって迎えていました。〔すなわち〕、まなざしを外から内に向けなおさせ、人間的な限界というものを知覚させる呼びかけをもって、です。

ある故事成句が、ギリシャ七賢人の一人プリエネのピアス〔**Bias** 前625-540頃〕の名のもとに伝えられています。彼の生まれ故郷の町を敵が占領し、市民がその町から追い出されてしまいました。今や人々は、残る全財産をとにかくできるだけ多く携えていこうとします。その際、ある男が、ピアスに同じようにするよう求めて言いました。「こうしよう、すべてわたしのものは、わたしが担うのだ **omnia mecum porto mea**」と。するとこのピアス、高く積み上げた荷車のおわきを、〔手ぶらで〕苦なく歩いて行ったのです。外面的な一切合財なしに、ただ裸の人間それ自体のあり様（**Bild**）で。私物（**Mein**）と非-私物（**Nicht-Mein**）との間、内面と外面との間には、このギリシャ人が悟っていたように、ただ此岸の全財産だけではなく、此岸の肉体と生命もあるということです。

ソクラテスとプラトンは、第一としてこの意味で、人間「自身」について語りました—ソクラテスの死後ずいぶん年が経ってからプラトンが書いたもの、つまり最悪には虚構的と言わねばならない「弁明」の中で—。この被告人ソクラテスは、堂々とそのオルタナティブな（社会的基準に基づかず型にはまらない）実存を自認します。彼は、収入、力と財、キャリア、表舞台での演説、あるいは行政長官職など、たいいていのものらが得ようとする事物に心煩わされたことなどありませんでした。むしろ、都市の同胞らに向かい、粘り強い問いと勧告をもって「最大の善」を明示するため声を上げるのです。「そうだ、やってみようではないか」と。続きはこうです。「君らひとりひとりが、それぞれ何であれ自分たちの抱えている案件に、もはや心煩わせなくなるようにしよう。自身を慮るまで、つまり、可能な限り善く、かつ可能な限り理のとあったものとなるため心配るに至るまで〔、わたしはそれを試みる〕。かつまた、それぞれ何であれ都市の抱える案件に、もはや心煩わさなくなるようにさせよう。それぞれが自分の都市自体を慮るに至るまで〔わたしはそれを試みる〕」。

プラトンは、この新しい「自ら自分自身を慮ること（**Sich-um-sich-selbst-Kümmern**）」に、さらなる説明の必要があるとみなしたのでしょう。「…可能な限り善く、かつ可能な限り理のとあったものとなるため」という言葉を付言しています。「なるため〔**Zu werden**〕」。かの賢者ピアスにあっては、彼自身が担い、〔すでに〕持っているものとし

て、すべてが「彼のもの〔Seinen〕」のであり、したがってそこでは、まだ、所有〔もつ=Haben〕ということが語られていました。しかし、ソクラテスにあって、かの「自ら自分自身を慮ること」にあっては、全く、ひとつの「生成〔なる=Werden〕」とひとつの「存在〔ある=Sein〕」こそが問題なのです。

この人ソクラテスは、生を導く価値を探求する中で一すなわち、公の広場での同胞の市民との継続の語り合いの中で一、彼自身の自己を発見しました。彼は一度その弁明演説の中で言っています。「常なる精査熟慮のない生など、ひとり人間として、決して生きるに値するものではない」と。ソクラテスは、この絶え間ない対話を、二重の奉仕と理解しています。まず第一に、彼自身の呼び方で言えば、「神奉仕／礼拝〔Gottesdienst〕」として、です。彼は、デルフォイの神に触れ、かの有名な「汝自身を知れ！」の言葉をうけて、その意味で神奉仕としての対話に従事するのです。平たく言えばこうです。「君がどれほど僅少にしかものを知らないか、どの程度のことを君がたずね求めてきたを、知るようになさい」。また、第二には、自分の生まれた都市への奉仕として、です。彼はこういった奉仕は、その「哲学」、その価値の探求によって、あるいは都市の同胞をそのような自己探求と自己発見に目覚めさせることをによってこそ喚起されると見たのです。

彼はひとたび、かの〔裁きの場で〕高位の紳士たるアテナイ人たちに語りかけます（彼は彼らに絶えず語りかけるのです—たとえ今彼を逃れさせようという動きがあったとして、そのようなときにも彼はそうするでしょう—これはほとんど、ソクラテス一流の皮肉な一太刀だと言いたくなるような言葉です）。曰く「君よ、あらゆるものの中で最も素晴らしい君はアテナイ人である、最も偉大かつ最も誉れ高き都市にして、学問と教育において第一級の都市の市民だ。しかるに、君は恥知らず、金と財を慮っては、可能な限りそれを得ようと心配り、あるいは大いなる名声と高位の官職のために心尽くす。だが、何とか可能な限り善くなるようにと、君の理性と君の魂—つまり、君自身、そう君の自己—に心を配り、慮ることを、君はしないのか？」このような類の、あらゆる人の耳に届いた政治家非難が、このやっかいな詰問者のもとに、若者のファンクラブを集める結果となり、この70才の男に、若者を墮落させたとの告訴を招くことになったとしても、不思議なことではありません。

ソクラテスは、人がその生活、その行動、その苦悩によって自ら形作り構成してきたこの自己のうちに、外面的な苦境も死刑宣告さえも損なうことはできない人間の最奥の中核をみつめます。そうして、彼はその最終弁論を終わるにあたり、逆説的な弁明をするに至ります。彼は、しかし、この過程にあっては、自分自身についての弁護はまったくしませんでした。というのも、告発者らは、彼自身を—その自己を—、とにかく全く損なうことができなかつたからです。彼は、自分よりも裁判官らの立場についての「弁明」をより多くしています。彼らが、デルフォイのアポロンによってアテナイ人らに宛てられた「神の賜物」〔ソクラテスのこと〕に両手を開かなかつたために、彼ら自身を—その自己を—、損なうことになるだろうというのです。

この、誓約をなした裁き手501人のいる世の裁判所が兆しとなって、思考は、彼岸の死の法廷へと至るのですが、この法廷を、プラトンは別のところ〔たとえば『国家』や『ゴルギアス』〕で、神話的なあり様（像）で描写しています。そこへは、死者は「裸」で入ります。ただすべて着衣がないというだけではなく、そこではあらゆる身体性もまた脱がされるのです。その剥き出しの自己をもって彼の裁判官らの前に踏み込むのですが、死の裁判官らもまた、彼に「ありのまま」で踏みこみます。それぞれの身体性はなく、目も耳もありません。対して、そこで言われているところによれば、「ただ彼の魂それ自体」を観察し、「ただ死者の魂それ自体を」裁くのだというのです。

おそらくみなさんはすでに、プラトンよりも4世紀ほど若いイエスの言葉については、長く思いを寄せてこられたことでしょう。そう、これもまた、迫りくる死をありありと思い浮かべて語られているものです。「人が全世界をもうけても、自分の魂／命が損なわれたら、なんの得になろうか」〔マルコ8：35〕。しかし、ここではひとつの新しい「学部」が、すなわち「神学部」が始まります。そしてそこには、その後なおひとりの正しき説教者が現れるのです。

神学に雇われた女中、哲学は、わたしたちを、まず後代のソクラテス信奉者、セネカのいたネロ帝時代のローマへと誘います。その時代は、まさに使徒ペトロと使徒パウロがその殉教の憂き目にあつた世紀です。当時、燃える訴え（Appell）を胸に抱いたセネカは、〔以下の言葉を皮切りに〕重要な書簡を著し始めました。「求めよ、君自身を、君自身のために！ **Vindica te tibi!**」〔ルキリウス宛書簡集第一書簡第一節〕。セネカの哲学は、全体として、この内奥の自己による一すなわち、この人間の唯一本来的な財産による一ひとつの訴え（Aufruf）です。魅惑的な名目的利益を前にして、損なわれずに護ること。自己の喪失／無駄遣いに取り消し線を引くことは、ばかにならないことなのです。

セネカは、後年、ネロによって自害を強要される少し前に、ある書簡でこのように書き留めています。「土地測量家は、わたしの所有地を測ることを教えようとするが、そのかわりに彼がわたしに教えたことは、あるひとりの人間にとって十分であるのはどれほどか、ということ…そして、いかにその人が余計なものを所有していることか、ということであった。彼の百万単位の遺産は、その管理能力を疲弊させているのである。…わたしにとって知る必要があることは、いかにして任意の土地を、多くしかじかの部分に分割できるか、ということである。しかし、わたしがそれを知らないとなれば、いかにしてその土地をわたしの兄弟と分かつてばよいのか？」

然り、たいていものは、余計という以上のものでさえあります。この書簡集の別の手紙には、こうあります。「ときおり、わたしたちにとって最も高くつくものを贈り物として受け取った、と思われるようなことがある。わたしたちの偏狭さにあっては、それひとつだけを買おうと考えるのだが、そのために払う硬貨はチャリンチャリンと鳴り続ける

のだ…また、それが贈られたものだといっても、そのことによって、わたしたちは自ら支払いの渦に飛び込むのである。…わたしたちの手に達するやいなや、すでにわたしたちの自由、わたしたちの自己をかすめ取っていく多くのものを、わたしは君に示すことができる。もしこれらの事物がわたしたちのものでなかったら、わたしたちは、わたしたち自身のものであったらうに —*Nostri essemus, sista nostra non essent.*」。

数週間前、ローマで、あるおしゃべりな石がわたしに初めて声を掛けてきました。いや、その石は知っていました、他でもないわたし自身が、頭の中で「自己」とやり取りしていたことを。彼は、ひとつの生からの出場と、もうひとつの異なる生への入場について語ってくれました。すなわちそれは、ヴィア・システーナ〔ローマ〕の石造りの家から、あちらの異なる場所に立つ他の材料でできた家へ移る、ということの意味します〔説教者交代にひっかけて〕。「いざわれら、余所（よそ）の手になる家を出で／身つから（自ら）建てし常しえに入らん **CITO HAC RELICTA ALIENA QUAM STRUXIT MANUS / AETERNAM INIBIMUS IPSI QUAM STRUIMUS DOMUM**」

クラウス・バルテルス

* []内は訳者の手になります。プラトン、セネカ等の引用は、バルテルス教授の説教原稿のドイツ語によりました。引用文献の出典および、説教原稿は、フラウミュンスター教会ホームページ (<http://www.fraumuenster.ch>)、「説教と礼拝 Predigt und Gottesdienst」の項でごらんいただけます。以下も含め、本訳文に関するご指摘、お問合せ等は訳者（大石 ohishi_shuhey@hotmail.com）までおよせください。

* * * * *

それからイエスは弟子たちに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。…」（マタイによる福音書 16章 24－26節 口語訳）

親愛なる教会共同体のみなさん

なんと興味深く、奥深い言葉（と世界！）の歴史を、クラウス・バルテルス氏はたどり、描き出してくださったことでしょう。ギリシャ語の「ごく月並みな言葉」で、「自ら」を意味する *αὐτός*（アウトス）から始まり、道しるべたる「自己（Selbst）」に至るまで。その「自己」を自己発見として見出すこと、これは今や本当に、人間にとってひとつの重要な課題です。というのも、神認識と自己認識と呼んで〔宗教改革者〕カルヴァンが強調したものは、互いに結び合った関係にあるからです。神を見出すものはこれ、自己自身に直面させられたものである—美しくも難しい表現ですが—、そこにあっては、「共なる人」〔*Mitmenschen*〕に直面させられるでしょう！

神なしに、かつ共なる人なしに自己を見出そうと欲するもの、その人は、おそらく、ただ疑わしいばかりの三位一体に直面することになるでしょう。ちょうど、アメリカの曲名「*My, Myself and I*（わたしの、わたし自ら、そしてわたし）」—ドイツ語に翻訳しようとする、と、「*Ich, Ich und nochmals Ich*（わたし、わたし、おまけにわたし）」となるでしょう—に似た響きが心に浮かびます。こういった疑わしき「わたし」の三位一体を、わたしたちは自分たちの文化のうちに持っていますし、特に最近でもあの銀行のスキャンダル以降、まったく多すぎる…と感じるほどです。

さて、今や、それを押しとどめるのが、この大きな、そして挑発的ですからあるイエスの言葉です。「だれでもわたしの弟子になりたいと思うなら、自分を捨てなければならない」—つまり、これは、この支配的な「私・わたし・ワタシ」に距離を置くことができる、ということです—。彼は、自己中心化を押し破ってひとつ歩を進めることができるに違いありません。そうして、「自分の十字架を負う」のです。ここで、ソクラテスの演説に近づきます。「自らのことのみを考えるもの、これは自己を損なうもの」—まさにそう、ソクラテスは、死への準備の只中になってなお、その裁き手たちの自己について考えていたのでした—、というのも、ここに立ちだかっているのはただ自己〔エゴ *Ego*〕中心的な自己〔*Selbst*〕ばかりではなく、人間であり、人間とともに危険にさらされているのは、真実だからです。

イエスは、弟子たちにかの御言葉を、神の平和の王国に関する使信の責任を負いゆく—たとえそれが、苦境に導くとしても担いゆく—ための準備を整えたまさにその地平で、語られました。イエスは、このことを、受難物語の始めに語っておられます。そのとき、加えておっしゃるのです。彼に従いたいものもまた、困難なときをともに分かちて担い、その信仰と、その確信とに責任を負う準備をしていなければならない、と。自分の十字架をひき受けることは、したがって、まったくもって消極的な事柄ではなく、また、ただ単純に従順にあらゆる苦悩を受け入れるというのでもなく、かなり積極的な事柄です。重大な事柄の責任を負いゆくこと—たとえそれが、困難な小道に導くとしても担いゆくこと—です。すると、そこに、イエスによる、神秘に満ちた基礎付けが続くことになります。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、救われるであろう」。ここで、おそらくわたしたちは、たじろがざるをえないでしょう。なぜなら、この言葉は、かなりキツク響くからです。それならば、この地上の生活において、わたしたちの信仰は、ほとんど気ままなものとはいかないということなのではないでしょうか？ たしかに—イエスのもとではそれほど感じないかもしれませんが—、たぶん、キリスト教史においては、ある熱狂主義の傾向が残念ながら潜んでいる、とあるいは言えるのではないのでしょうか？ いや実際またわたしたちは、いかばかりかでもわたしたちの命を救いたい、

そう望むだろうし、そう望むべきである、そうではないでしょうか？

さて、ここ〔当該の聖書箇所〕で、ドイツ語でLeben〔日本語で命〕と訳されているところには、〔原文で〕プシュケーΨυχήというギリシャ語があり、これはまた、魂〔Seele〕をも意味します。ですから、わたしたちはまた、必然的にこのように聞き取ることもなります。「自分の魂を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の魂を失う者は、それを救うであろう」。おそらくもうはっきりしてたのではないのでしょうか。ここで問題なのは、わたしたちの「自己」なのです。すなわち、人が神の前に立ち存在するとき、まさに、わたしたちが自分自身ばかりでなく、深い人間存在の神秘に生きようとし、またそれを護ろうとするとき、そのときに立ち現れる、あの「人間の中核」が問題なのです。したがってまたここで問題なのは、わたしたちがただ自分自身に最高の価値をおくのかどうか、そして、ただ自分だけを中心ぐるぐる回っていくのかどうか、あるいはそれとも、そうではない、とするのかどうか、です。自分自身だけ、自分の魂だけ、自分の命、自分の救い、自分の健康だけしか視野に持っていない人、そのような人はそれを失うでしょう。なぜなら、人は独りでは「自己」を見出し、あるいは保つことができないからです。

また、それゆえに、今やこの、イエスによる第二の、筋のとあった力強い基礎付けが語られるのです。「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」。これは、大きな力に満ちた命の規範、魂の教えです。わたしたちは、こう言われているのです。》君は、ただ君自身ばかりに自分を探し求めても、そこに君を勝ち得ることはない。たとえ君が、他者にあい対しあるいは神に相対するような、力に満ちた自己をおそらくは求め、そのような自己を成し、それを護りたいと望むだろうとしてもだ。そのようなときには、君はたしかに君を失うだろう。なぜなら、君がそんな風に、君自身だけしか相手にせず、新しくされた人間性や、似姿性や、キリストのお姿を、君のうちに開くものとしなからだ。だがそれらは、わたしたちの自己を超越した事柄に開く用意がある人のところ—自らを投げ出す用意、そう、つまり、犠牲をささげる用意のある人のところ—にこそ、育つのだ。《犠牲については、つねに極端に考える必要はありません。それは、自分の命を与えてしまう、というのともはや同じとは受け止められないかもしれません。しかし、おそらくは、自分の命のいくらかでもささげていくこと、と考えることはできるでしょう。自分の時間、自分の愛、自分の想像力

〔Fantasie〕、自分の力のいくらかでも、と。それからまた、もしそれがキツイと思われるようなとき、他の道のほうが簡単に思われるようなときであっても、ささげるところに身をおいてみる。犠牲が常に受難を意味する、というわけではありません。犠牲をささげる、ということは、しばしば単純に、贈り物ができるといふことであり、気前のよさや献身を意味するものでもあるのです。少なくとも、「私、ワタシ、わたし」というかの非・聖三位一体より以上のあり方、です。

親愛なる教会共同体のみなさん、わたしたちは、待降節（アドヴェント）に入っています。ええ、受難の時ではなく、まず降誕説（クリスマス）のときを前にして。それは、わたしたちにとって、神がこの世にこられたことを祝う時です。わたしたちの信仰によれば、そこで神は、いわば、ご自身の存在の神秘性が輝く、だれにも侵害されない領域から、身を投げ出して、人となられるのです。そこで、人間は新しい希望を勝ち取り、一緒になって、ともに祝うのです。しかもこの出来事を、人間は、まさに人間的に果たします。神人となりたもうこと〔受肉 Menschwerdung〕は、神学的に表現された「明け渡すこと／献身」であり、神の贈り物です。それはわたしたちに—すなわち、自分がどれほど神に負っているか、またどれほど他の人々のおかげをこうむっているか、を知っている人々に—「人間的に」果たされます。これを実現するものはこれ、感謝にたえぬものとなるでしょう。彼は、即座に気づくのです。恵みとは何を意味するかを。つまり、これほどに多くの贈り物を受けているからには、自身もまた与えたいと望むほかは、ほとんど何もなしえない、そういうことです。

愛するみなさん、ほんとうの、真実の自己への道は、閉じられた内面の内に歩む道ではありません。そうではなく、共なる人々へ、そして世へ、歩み入る道です。ロバート・ラックスというアメリカの詩人、神秘家があります。彼は、そっけなくもいたずらっぽい調子で、次のようなことを書き留めています。彼の医者が彼に助言して言ったそうです。「君は君自身であれ」と。「やってみようじゃないか！」彼は車を走らせまっすぐ家路につくのですが、その帰途で、試してみようと思ったといいます。「しかし、僕が他にいくつかのことをやってみたときもそうだったけれど、今回も結局のところ、それがどんどん容易なことではなくなっていく、ということが明らかになるばかりだった“it turned out not to be easy...”」。いや、それはきっと、彼が静かな小部屋にこもってしようとしたために、そういう結果だったのでしょう—神がこの世に、この人間のもとに來られ、人の姿をとり、ご自身から多くを犠牲にして、わたしたちにご自身の命を贈りとどけてくださっているその間、そうしてわたしたちの内に、それによって新しい希望を贈り物として受けたものたちがいるそのような時に〔、自分の小部屋に閉じこもっていたのですから…！〕。まさにこのような神認識こそ、思慮へ、そして自己認識へと導くのです。アーメン。

ニクラウス・ペーター